信州大学所蔵石井鶴三関連資料にみる伊那彫塑講習会のあらまし【報告】

大　島　賢　一　（信州大学学術研究院教育学系）

１．はじめに

大正13年(1924年)8月、石井鶴三は、長野県上田において開かれた教員のための彫塑講習会の講師を務める。以来、昭和45年(1970年)まで、昭和20年(1945年)の一度の休講を除き、石井は毎夏、講習会講師として上田を訪れることとなる。そして、この講習会を皮切りに、石井と長野県の教育界の間には様々な関係が切り結ばれる。そうした関係の中でも中心的なものは、上田のものを代表とする、石井を講師として長野県各地で開催された彫塑、絵画の講習会であろう。

石井は、昭和3年(1928年)から6年(1931年)にかけての4年間、上伊那郡において開催された彫塑講習会の講師を務めている。この講習会の開催にあたっては、原才三郎や伊藤眞之助といった当地の教育者や、上伊那出身の画家、中川紀元の関与があった。信州大学所蔵の石井鶴三関連資料の中には、それらの人物から石井に宛てられた書簡等、本講習会に関わる複数の資料が確認できる。これらの資料からは、石井への講師依頼の経緯や、講習会の実施にあたっての日程等の調整、そして意によらず講習会が終了した経緯を伺うことができる。そこで、本稿ではそれらの資料を整理、検討し、伊那彫塑講習会のあらましを確認する。それによって上田から始まった石井の講習会が具体的にどのように他地域に伝播したのか、そして、石井がどのようにして長野県各地域と関わり、影響を有していったのかということを明らかにする。また同時に、このことは、長野県における美術教員の講習の実際について、その中心人物や往時の教育、社会との関わりを伺う上で重要な視点を提供することになると考えられる。なお、以下の文中においては、信州大学所蔵石井鶴三関連資料については、信州大学附属図書館によって資料整理のために付された仮番号をブラケット内に記す。

２．信州大学所蔵石井鶴三関連資料中の伊那彫塑講習会関係資料について

信州大学所蔵石井鶴三関連資料の中には、上伊那で初めての彫塑講習会が開催された昭和3年（1928年）から、昭和7年(1932年)までにかけて、上伊那の教師たちを発信者とする書簡が含まれている。それらの書簡を発送年月日順にまとめると表1のようになる。なお、いくつかの書簡はすでに『石井鶴三全集』において翻印がなされている。それらについては、掲載巻とページを表中に記載した。また、表中の書簡の他に、第1回目の講習会の参加者名簿と思しき資料［馬場26-208］の存在も確認できた。

表１．伊那講習会関連書簡　【資料】伊那彫塑講習会関係資料　翻印

年	月	日	発信者	受信者	仮番号	全集掲載ページ
昭和 3 年	4	27	原才三郎	中川紀元	書 10-323	4 巻 pp. 53-54.
(1928 年)	5	4	中川紀元	石井鶴三	書 13-696	
	6	2	原才三郎	石井鶴三	書 10-246	
		12	原才三郎	石井鶴三	書 10-245	
		17	丸山清人	石井鶴三	書 10-240	4 巻 p. 54
		20	中川紀元	石井鶴三	書 10-225	
		30	原才三郎	石井鶴三	書 10-244	
	7	6	丸山清人	石井鶴三	書 10-239	
	10	23	原才三郎	石井鶴三	書 10-243	
	11	15	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-322	
	12	26	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-238	
昭和 4 年	2	20	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-235	
(1929 年)	9	9	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-233 書 10-234	
	10	25	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-51	
昭和 5 年	5	15	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-231 書 10-232	
(1930 年)		21	原才三郎	石井鶴三	馬場 26-76	
	7	16	原才三郎	石井鶴三	書 10-237	
		27	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-236	4 巻 p. 229
		30	原才三郎	石井鶴三	書 10-242	4 巻 p. 229
	8	27	原才三郎	石井鶴三	書 10-230	4 巻 p. 234
	9	5	伊藤眞之助	石井鶴三	馬場 37-81	
	12	22	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-227	5 巻 p. 70
昭和 6 年	8	17	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-229	
(1931 年)		24	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-226	5 巻 p. 54
	11	18	伊藤眞之助	石井鶴三	書 4-90	
	12	22	原才三郎	石井鶴三	書 10-241	5 巻 p. 70
昭和 7 年	5	24	伊藤眞之助	石井鶴三	馬場 37-82	
(1932 年)	6	28	伊藤眞之助	石井鶴三	馬場 37-83	
	7	2	伊藤眞之助	石井鶴三	書 7-127	
		9	伊藤眞之助	石井鶴三	馬場 37-84	
		30	伊藤眞之助	石井鶴三	書 10-228	5 巻 p. 119

これらの資料には、当時、伊那小学校の校長であり、上伊那郡教育会の会長でもあった原から、中川に宛てられた、彫塑講習会の講師として石井を紹介してほしい旨を記した書簡［書10-323］や、原、伊藤、丸山清人ら当地の教師たちから石井に宛てられた、講習会の実施に関わる諸連絡、礼状など、直接彫塑講習会に関わるものが多数含まれる。その他に、伊藤から差し出された近況報告や挨拶状［書10-235］、［書10-231］、［書10-232］や柿の送り状［書10-51］、［書4-90］など、講習会に直接関わりのないものも含まれるが、これらの資料も、当地の教育者たちと石井の関係性をうかがわせるものである。また、原と伊藤を発信者とする資料には、昭和5年(1930年)12月7日に開館し、その初代館長を原が担った上伊那図書館の開館記念の展覧会等に関する連絡状［書10-227］、［書10-241］や、伊藤が参加していた伊那の絵画同好会「黒百合会」の展覧会に関わる連絡状［書10-322］、［書10-238］など、当時の上伊那の芸術文化活動の状況をうかがわせるものもある。

３．伊那彫塑講習会の開催と石井鶴三の招聘

信州大学所蔵石井鶴三関連資料中、伊那彫塑講習会に関わる書簡のうち、最も日付の古いものは、昭和3年(1928年)4月27日付の原から中川に宛てられた［書10-323］である。この書簡は、『石井鶴三全集　4巻』に翻印収録されている[1)]。

原については『長野師範人物誌』に詳しい[2)]。同書によると、原は明治9年(1876年)上伊那郡朝日村平出(現辰野町)に生まれる。明治22年(1889年)に箕輪高等小学校を卒業し、同年伊那富尋常小学校の代用教員となる。明治28年(1895年)には長野県尋常師範学校(明治30年に師範学校令により長野県師範学校に改称)に入学し、明治32年(1899年)に卒業している。以降、長野県師範学校附属小学校を始め、伊那尋常高等小学校、朝日尋常高等小学校、長野市後町東尋常高等小学校、松本女子師範学校附属小学校などに勤務し、大正6年(1917年)7月より伊那尋常高等小学校校長兼伊那農商補習学校校長となっている。大正7年(1918年)には上伊那教育会長となる。教育会長としては『上伊那郡史』の発行事業などとともに、中等教育機関の整備や、上伊那図書館の設立に尽力している。昭和5年(1930年)に上伊那図書館が開館した際にはその初代館長となり、昭和6年(1931年)には伊那尋常高等小学校長職を辞し、専任の館長となっている。図書館長は翌昭和7年(1932年)まで務めた。昭和20年(1945年)、享年70歳で没している。

一方、大正8年(1919年)に渡仏、マチスに師事し、フォーヴィスムの日本への紹介者としても知られる中川は、原と同郷(長野県上伊那郡朝日村)の画家である[3)]。大正期には茅野で代用教員をしていたこともあり、長野県の教育界ともゆかりがある。また、中川は石井の兄である石井柏亭にも師事していた。

さて、［書10-323］では、高等小学校における手工科の「必須科」化に伴って、塑像の講習会を成すことが有志教員によって発起され、同年の6月に開催予定であること、その講師として石井鶴三を招きたいのでその承諾を得てほしい旨が綴られている。同年5月4日付の中川から石井に宛てられたハガキ［書13-696］では、中川が石井とコンタクトを取ろうとしたが、行き違ってし

まった旨、「甚だ御厄介の件」について「もしご都合が何とか御繰合せ願へましたら是非御出向」願いたい旨が綴られている。具体的な記述はないが、時期から考えて、伊那の講習会講師の依頼と考えて間違いないだろう。4月27日付の書簡を受け取った中川が、時をおかず石井とコンタクトを取ろうとしたことがうかがえる。

明治5年(1872年)の学制発布と同時に図画科[4)]が設置されたのに対して、手工科は明治19年(1886年)に創設された。創設当初は高等小学校における実業科目としての性格をもつ加設科目であり、文部省令「小学校ノ学科及其程度」において「土地ノ情況ニ因テハ英語、農業、手工、商業ノ一科若クハ二科ヲ加フルコトヲ得」とされている。明治23年(1890年)の「小学校令」によって尋常小学校でも加設科目となる。大正15年(1926年)4月22日、小学校令の中改正によって、手工科は「農業、工業、商業」といった実業科から切り離され、高等小学校の必修科目となる。［書10-323］中に「昨年から高等科に手工を必須科として加えられ」とあるのは、そうした事情によるものである。手工教育は、大正期の美的教育や図画科における自由画教育などの創造主義的な教育の影響もあり、技術的、実業的科目というよりは、平面芸術を扱う図画科に対し、立体造形芸術を扱い審美心等を養う一般陶冶を目的とした立体造形の科目として理解されていた部分がある。そうした中で、「従来粘土細工として課してきた所に満足できず教師の着眼や鑑賞眼や其他手工についての態度を作りたい」という意識が教員たちの間に立ち上がり、そのため石井を講師とした彫塑講習会が企画されたとみられる。

石井は、前述の通り、長野県の上田に大正13年(1924年)より彫塑講習会の講師として招かれている。上田での彫塑講習会もまた、当地の教師たちが大正15年(1926年)の高等小学校における手工科必修化を睨んで企図したものである。原が中川に石井への講師依頼をした昭和3年(1928年)までに、上田ではすでに4年間、4度の講習会が開催されている。上伊那で新たに開催する彫塑講習会の講師として石井が選ばれたのは、上田での石井の実績や評判によるものなのか、それとも、上田での講習会での来信に合わせて伊那へ招聘することが都合が良いと考えたのか、そうした当時の教員の意図について十分に明らかとする資料は今の所見つかってない。ただし、原が「粘土細工として課して来た所に満足できず教師の着眼や鑑賞眼」といったものを養うために講習会を開催したいとしている点は注目に値する。上田での講習会が開催された際、石井は、粘土細工の講習ではなく、立体芸術としての彫塑講習であれば講師を引き受けるとしている。粘土細工に満足できず、より高次の着眼や鑑賞眼を得るための講習会という設定は、まさしく石井の意図に適ったものであることが指摘できよう。

この依頼ののち、石井は上伊那の講習会講師を引き受けることとなる。日程調整等のやり取りが、原と彫塑講習会の委員の一人である丸山の書簡によって残されている。丸山については、手紙の差し出し地が東箕輪村となっていることと、資料［馬場26-208］より、当時中箕輪小学校の教師であったということが伺えるが、それ以上の情報については今回得ることができなかった。

４．伊那彫塑講習会の様子について

第1回目の伊那彫塑講習会は、昭和3年(1928年)6月22日から26日までの5日間、伊那小学校を会場として開催された。開催期間は、6月19日から23日に開催された上田講習会と連続するように設定された。石井は、21日に上田での講習会を切り上げ、その日の夜行で伊那へと向かったことが、妻美佐に宛てた書簡によって確認できる[5)]。講習会の日程については、上田の講習会、伊那の講習会それぞれの会員と石井との間で調整がなされた様子を、全集収録の、石井から上田彫塑研究会の会員田玉孝平に宛てられた書簡[6)]や、丸山を差出人とする石井宛書簡［書10-240］などによって確認することができる。

この会の様子について、参加者の一人である中嶋亀孝による回想が上田彫塑研究会によって編まれた『石井鶴三先生―信州上田と』に収録されている。中嶋は伊那の講習会で石井と出会い、伊那での講習会が開催されなくなった後は長野で開催された石井を講師とする彫塑講習会に参加し、その長野の講習会が上田の講習会と合流したことで、上田彫塑研究会の会員となった。以下、長くなるが、中嶋の回想を引用する。

> 私は石井鶴三先生講師の伊那、長野、上田の三つの講習会で受講している。昭和四年伊那小学校に粘土の講習会があり、上伊那郡各校一名宛ということで、私の勤務校からは手工の主任が受講することになっていた。六月の農休でこれといってあてもないから、校長先生にお願いして、主任と私も受講した。彫塑台、粘土箆、ペンチ、会費等一切を学校で用意していただいて、今にして思うと非常に恵まれた講習であった。
> 五日間ぼんやりと過ごしてしまい、時々先生がお見えになり黙って見ていかれたこと、終了式の時石膏取りについて説明されたことだけが記憶に残っており、与えられた室でモデルを作ったというだけのことであった。
> 昼食は一室に集まり先生とご一緒であった。髭があり、恰幅が良く、とても大きく感じられた。口数も少なく、お茶でなく水を飲みになり、胡瓜をナイフで切っては食べておられた。二年目は手工の主任は受講しなかったので、私一人が受講した。割当てられた室に石井先生が作っておられ「心棒は土をもたせるだけでなく動勢をつかんでいなければいけない。」と話され、初めて動勢という彫刻用語を知った。石井先生の作られている作品は何を作っているかわからなかった。三日頃になって、先生の作品が非常に大きく、張りがあり、みずみずしいのに気付き、私ももっと大きくすればなんとかなると思い、粘土をつけてもつけても大きく見えず、水をかけてもみずみずしくは見えない。休憩時間に先生の作品をそっと手で計ってみると、私のよりずっと小さく、水をかけていないのになんとなくみずみずしく見えるのに驚き、彫刻というものは不思議なものだと気付いた。これが講習会に出る一つのきっかけになったかと思う。この年も全体で各室を回ってご指導されることはなかった。終了式の折先生から総評をいただき「犬も歩けばボォー(美)にあたる。」「三べん回って土づけしよ。」という話を伺ったことと、生硬という彫刻用語だけが記憶に残っている。初めて石膏にしてみたが、先生方から五日も

かかってこんなものかと笑われたことも思い出の一つである。伊那の講習会は二年で無くなった。
三年目は有志六人で夏休みに伊那小学校に集まり講師なしで始めた。五日目に石井先生が上田からのお帰りにわざわざおいでくださり、胸部の動勢、塊についてご指導いただいたことが、昨日のことのように思い出される。
中嶋亀孝「彫塑講習会と私」『石井鶴三先生―信州上田と』小県上田教育会、1974、pp. 156-158.

中嶋の回想では、初回講習会は昭和4年(1929年)となっており、以降2年間続いたのち、3年目は有志で行なったとされている。この他にも『日本美術年鑑』昭和49・50年版の物故者記事中にある石井の略年譜でも、伊那彫塑講習会について「昭和4年　伊那の彫塑講習会の講師となる。(翌年まで2回、3回目からは有志による)」といった記述が見られる[7)]。これらの記述については、次のように考えられる。まず昭和3年(1928年)に伊那での彫塑講習会が開催されたことは、複数の資料から確認できる[8)]。ただし、原書簡［書10-323］に「本郡教育会の有志が発企し会が補助して」講習会を開くことに決まったとあることから、昭和3年(1928年)の講習会は、上伊那郡教育会による事業ではなく、有志教員によるものであったと考えられる。教育会の主催事業である昭和4年(1929年)、5年(1930年)の講習会については『上伊那教育会沿革誌』にも記載が確認できる[9)]。中嶋は自身の参加した初回の講習会が「六月の農休」に開催されたとしている。昭和4年(1929年)の講習会については、『上伊那教育会沿革誌』によって8月17日から21日にかけて開催されたことが確認できる。伊那の講習会が6月に開催されたのは、昭和3年(1928年)の他にはない。よって、中嶋回想中の「昭和四年」の「伊那小学校」での「粘土の講習会」は昭和3年(1928年)開催の第1回目の伊那彫塑講習会についての回想であると考えられる。

石井が田玉に宛てた昭和3年(1928年)7月5日付の書簡が『石井鶴三全集　4巻』に収録されている。この中で石井は、伊那での講習会の感想を次のようにもらしている。

伊那では会員五十四名六室に別れてやりましたが大変でした　会長さんとモデルさん皆よき人にて幸せでした　会員諸氏の中には最初少々真面目でないように見受けられるものも幾分ありましたが　日を重ねるに従い全体の空気がひきしまっていったのは有りがたく思いました
相当の効果はあったらしく　とにかく立体の世界の一端に触れた一種の不思議な感じは人々の心に残った事と思います
それがこれからどう発展するか　或はこのまま萎んでしまうか　それは今後の成り行き如何にあるのでありますがよき成長をひたすら祈り居ります
『石井鶴三全集　四巻』、形象社、1986、p. 88.

会員54名が6室に分かれたというのは［馬場26-208］[10)]の名簿と一致する。「天ノ四」に中嶋亀

孝（名簿中は旧姓の櫻井となっている）を確認することができる。中嶋は高遠小学校の所属となっており、「天ノ九」には同じく高遠小学校の前田孫作という名前が確認できるが、これが手工の主任教員であろう。

中嶋の回想や石井の書簡から、伊那彫塑講習会の様子が伺える。もともと石井は上田に講師として招かれた時から、日本美術院の研究所を上田へうつす気持ちで、日本美術院三即のうちの一つ「一　日本美術院は芸術の自由研究を主とす。故に教師なし先輩あり、教習なし研究あり」を掲げ、人物のモデルを立て、会期を通して、それぞれの会員が自作を制作するという方法をとった。会期中は石井も他の講習生と並んで制作を行った。粘土や用具の基本的な説明や、心棒の組み方、石膏の取り方などの教授は行われるものの、それ以外については、自主研修であり、講習生は中嶋のように、作業する石井の様子や制作途中の像を見たりすることで学んでいった。伊那での講習会も上田等で開催された石井の彫塑講習会のスタイルと同じものであったことがうかがえる。

５．伊那彫塑講習会の終焉

伊那彫塑講習会は、昭和3年(1928年)6月22日～26日(第1回)、昭和4年(1929年)8月17～21日(第2回)、昭和5年(1930年)8月11日～15日(第3回)、昭和6年(1931年)8月18(?)日～25日(第4回)の4回が開催されたことが確認できる。いずれも会場は伊那小学校であったと考えられる。このうち、昭和4年(1929年)と昭和5年(1930年)に開催された講習会は、先述の通り上伊那郡教育会の主催事業として行われた。昭和6年(1931年)の第4回目の講習会は、教育会の主催を離れ、有志教員による自主的な講習会として開催された。

第4回講習会については、資料に乏しく正確な開催期間が明確にできない。石井鶴三が昭和6年(1931年)8月21日の夕方に上田から伊那へ移動していることが全集収録の美佐宛て書簡によって確認できる[11)]。中嶋の上記回想中にある「有志六人で夏休みに伊那小学校に集まり講師なしで始めた」講習会が、3年目のものではなく、昭和6年(1931年)のものを指すとすると、「五日目に石井先生が上田からのお帰りにわざわざおいでくださ」ったとあることから、21日の夕方に上田をたった石井が、22日に伊那の講習会場に現れたと考えられることから、講習会は18日から開催されたと考えることができる。このことは、8月15日から21日にかけて開催された上田での講習会指導に当たっていた石井に差し出された昭和6年　(1931年)8月17日付の伊藤書簡［書10-229］とも符合する。昭和6年(1931年)8月24日付の石井宛て伊藤書簡［書10-226］は、石井への指導の礼状となっている。この中では、石井が伊那を去ったのちの23日、24日の活動の様子と、翌25日に石膏取りを行う予定である旨、それによって講習会を終了する旨が報告されている。したがって、この講習会そのものは、18日から25日にかけて開催されたと考えることができる。

伊藤は、伊那地方の中心的な美術教育者であり、また在野の画家としても活躍していた。伊藤についての記事は『長野師範人物誌』[12)]『長野県美術大辞典』[13)]などで確認することができる。それらによると、伊藤は明治25年(1892年)下伊那郡伊賀良村(現飯田市)生まれ、明治43年(1910

年)に下伊那郡教員養成所卒業、大正元年(1912年)には長野県師範学校第4種講習科を第1期生として修了している。第4種講習科は、小学校手工、図画専科正教員養成のためとして、明治45年(1912年)4月に設置された。この講習科は尋常小学校准教員以上の免許状保有者あるいは中学校卒業者を対象として、修身、手工、図画、教育、物理、化学の学科目を半年間のカリキュラムによって修めさせるというものである。週当たりの教授時間は34時間となっており、手工、図画にそれぞれ12時間ずつの24時間が当てられている。入学者は各郡市に配当され、各回おおよそ20名とされている[14)]。したがって各群市から推挙された講習生たちは、修了後、各地域の図画手工教育の中心を担うことが期待されている[15)]。例えば本講習科の1期生には他に、竜丘小学校でいち早く自由画教育に乗り出し、山本鼎の協力者となった木下茂雄(紫水)などがいる。伊藤もまた講習科修了後は下伊那郡の松尾小学校などで勤務し、当地の図画・手工教育の中心的人物となっていく。大正14年(1925年)には伊那小学校に移り、昭和15年(1940年)まで同校の図画・手工の専科正教員を勤めている。石井の彫塑講習会は、この伊那小学校勤務時代に重なる。伊藤は会場校の図画・手工の専科正教員として講習会に中心的に関わっていったと考えられる。また、伊藤は在野の画家としても活躍している。「黒百合会」という大正13年 (1924年) 頃に結成された絵画の同好会に参加し、昭和6年(1931年)には新たに「ソリッカ協会」という美術団体を設立している。昭和８年(1933年)には、自身の参画していたそれらの団体を統合し、伊那美術協会を設立し、昭和29年(1954年)までの22年間、その会長を務めるなどした。

伊藤から石井に差し出された書簡から、伊藤が、遅くとも昭和5年(1930年)には伊那彫塑講習会の実質的な責任者となり［書10-236］、さらに教育会の主催事業から外れてのちは有志会員の取りまとめ役を担っていたことがわかる。また、結果的には実施されなかった5回目となるはずであった昭和7年(1932年)の講習会の日程調整について、同年5月から7月にかけて、伊藤から石井に差し出された書簡が残っている。これらの資料によって確認できる伊那彫塑講習会中止の経緯は、当時の伊那の教師たちが置かれた状況を赤裸々に物語るものであり、興味深い。

昭和7年(1932年)5月24日付の石井宛書簡［馬場37-82］において伊藤は伊那での第5回講習会として、「20名を幾人か越す」有志による会を8月に企画しており、5日程度の指導を願いたい旨を石井に伝え、石井の予定を尋ねている。［馬場37-83］［書7-127］［馬場37-84］の書簡は、その日程調整を進めるものである。しかしながら、昭和7年(1932年)7月30日付の書簡［書10-228］において、第5回講習会について、開催を見合わせる旨が石井に告げられる。本書簡によると開催を見合わせる理由として、同月25日に講習会のための会合を開いたところ、「検定試験を受けるもののために県の主催で開かれる学力補助講習会」と日程が重なってしまい出席の叶わないものがいること、その他の教員にも4月、6月から給与未払いの状態にあるものがあり、「欠食教員」も出るような状態で、講習に参加できるものが少ないことが明らかとなったことが挙げられている。

昭和4年(1929年)アメリカに端を発する世界恐慌の波は、日本にも波及する。特に、養蚕製糸を中心的な産業としていた長野県は、アメリカ向けの輸出品目としての生糸の価格の暴落によって、農村恐慌をきたす。そのような状況の中で教員の給与未払いや寄附の強要、学級整理による人員の整理が行われた。教員給料の不払いは、昭和6年(1931年)から7年(1932年)にかけて長野県

下の43パーセントの学校、教員2716名に及んだとされる[16]。そうした中で、教員たちの中には社会主義運動に傾倒していくものたちも現れ、昭和8年(1933年)には、治安維持法違反を名目に、長野県下の多数の教員が検挙されるという、いわゆる二・四事件も発生している。この時の検挙者数は608名にのぼり、内230名が教員であった[17]。上伊那郡においても31名の教員の検挙者が出ている[18]。

上伊那の彫塑講習会が開催されていた時期というのは、この恐慌期に重なる。上述のように多くの学校において、給料の不払いがある中で、伊那小学校は昭和6年(1931年)6月に半月の遅配があったのみで、寄附の強制なども実施されなかったと[19]いうことであるが、当時の教員の給料は町村費によって賄われているため、上伊那郡内であっても、講習会参加者の間では所属学校によって相当の差が生じていたと考えられる。昭和6年(1931年)の講習会については、集まれるものだけ、6名で行なったが、いよいよ昭和7年(1932年)となると教員の困窮も極まり、実施がかなわなかったということであろう。

６．終わりに

上伊那での石井による彫塑講習会は、当地の有力な教育者であった原才三郎や、画家中川紀元、そして美術教育の主導的立場にあった伊藤眞之助といった人物の関与によって実現した。石井にとっても、現地の教師たちにとっても有意義に感じられる会であったが、世界恐慌前夜の昭和3年(1928年)に始まり、農村恐慌の中、回を重ねていった本会は、昭和7年(1932年)に不況の影響を直接に受ける形で閉じることとなった。

長野県では、二・四事件によって、大正期以来の自由主義教育が教員の「赤化」へとつながったという世論が形成される。そうした中で、当県の教育に強力なイニシアティブを有する信濃教育会は「唯物的思潮を一掃し精神生活の向上をはかること」「国民的自覚を促し欧米崇拝の弊風を打破すること」「国体観念を明微にし国民的信念を涵養すること」「徒に新規を逐ふの弊を矯め堅実なる研究の風を作興すること」などからなる「本県教員思想事件に関する対策」[20]を昭和8年(1933年)7月の常任委員会で決定した。これらの一連の展開は、大正新教育に発する自由主義的なものであった長野県の教育方針を、軍国主義的なものへと転換させる契機となっていく。上伊那の彫塑講習会の開催期間というのは、この教育の風潮が急速に転換していく時期と重なる。また、教員の窮乏という現実的な問題と、二・四事件による大量の教員検挙は、その後の教員たちによる様々な組織的教育運動や、新しい教育思想の導入を行うということを難しくしたことが指摘される[21]。石井による彫塑講習会は、山本鼎による自由画教育運動に連なるものであり、大正期自由主義教育の延長に置くことができる。そうすると、この講習会の終焉も、長野県教育の思想的転回と結びつけたいという欲求にかられる。しかし、上田での講習会が継続し、さらには昭和8年(1933年)に長野市において石井の彫塑講習会が新規に開講されていることからも、それは早計であると考えられる。むしろ、そうした中で、石井の講習会がどのように受け入れられて

いたのかということを、他地域での講習会での記録などを検証しつつ明らかにする必要がある。それについては、稿をあらためて検討したい。

---

1) 『石井鶴三全集　4巻』、形象社、1986、pp. 53-54.
2) 市川本太郎『長野師範人物誌』信濃教育会出版部、1986、pp. 306-308.
3) 中川紀元については、『中川紀元画集』信濃毎日新聞社、1982を参考とした。
4) 学制発布当初は画学とされていたが、のちに図画科にあたらめられた。
5) 『石井鶴三全集　4巻』p. 82-83.
6) 同上、p. 87.
7) 東京国立文化財研究所美術部編『日本美術年鑑　昭和49、50年版』、東京国立文化財研究所、1976、pp. 233-234.
8) 書簡資料以外に、信濃教育会の機関紙『信濃教育』第499号(1928年5月号)掲載の部会報中に、上伊那部会の「昭和三年度ニ於ケル主ナル事業」の一つとして「彫塑講習会　六月　五日間」(p. 104)の記載が確認できる。
9) 上伊那郡教育会『上伊那郡教育会沿革史』上伊那郡教育会、1967、pp. 31-32. ちなみに本書でも、昭和3年(1928年)開催の事業の中に彫塑講習会を確認することはできない。
10) 本資料は、教室名と席次、参加者の所属学校名と氏名が記されたものであり、日付などの記載はない。伊那小学校所属とされる教師として、渡辺文好、有賀積男、竹村久衛、下島義一、伊藤眞之助が確認でき、このうち、竹村については、昭和3年まで伊那小学校に在籍し、昭和4年以降は在籍していないことが、『伊那小学校百年誌』によって確認できる。よって、昭和3年開催の講習会の受講者名簿であると考えることができる。
11) 『石井鶴三全集　5巻』形象社、1987、p. 49.
12) 市川本太郎、前掲書、pp. 460-461.
13) 小崎軍司編著『長野県美術大辞典』郷土出版社、1986、p. 226.
14) 『信濃教育』第305号(明治45年3月)の附録として、明治45年度より、長野県師範学校に第一種、第三種、第四種の講習科を設置する旨を告げる「長野県告示第27号」が掲載されている。
15) 長野県師範学校の手工教師斎藤金造は講習科入学希望者に対して次のように記している。「本講習科に入らんとする人は、手工や図画の技術を学ぶ外に、立派なる教育上の識見を養ふべく、勉めんとする努力が必要である、猶又、将来専科教師として立つ場合には、多数の教師の間に立て、担任教科の進むべき正しき道をたどり、時には他の教師に対して、指導者たるの位置にも、立たねばならぬ関係があるから、よくよく自己の性格や年齢を考へて、堅き信念を以て入学して貰ひたいと思ふ」斎藤金造「本県手工図画教授の将来と第四種講習科」『信濃教育』第305号(明治45年3月)、pp. 7-11.

16）伊那小学校百年史編集委員会『伊那小学校百年史』伊那小学校百年史刊行委員会、1971、pp. 329-330.
17）柿沼肇「信仰教育運動と「二・四事件」（長野県教員赤化事件）の社会的意義」『日本福祉大学研究紀要―現代と文化』第111号、2005、p. 23.
18）伊那小学校百年史編集委員会、前掲書、p. 338.
19）同上、p. 330.
20）長野県教育史刊行会『長野県教育史 第十四巻　資料編八』、長野県教育史刊行会、1979、pp. 1069-1070.
21）柿沼、前掲書、p. 34.

参考文献

- 『石井鶴三全集　4巻』、形象社、1986
- 『石井鶴三全集　5巻』、形象社、1987
- 市川本太郎『長野師範人物誌』信濃教育会出版部、1986
- 伊那小学校百年史編集委員会『伊那小学校百年史』伊那小学校百年史刊行委員会、1971
- 植村鷹千代監修『中川紀元画集』信濃毎日新聞社、1982
- 柿沼肇「信仰教育運動と「二・四事件」（長野県教員赤化事件）の社会的意義」『日本福祉大学研究紀要―現代と文化』第111号、2005、pp. 23-50.
- 上伊那郡教育会『上伊那郡教育会沿革史』上伊那郡教育会、1967
- 小崎軍司編著『長野県美術大辞典』郷土出版社、1986
- 斎藤金造「本県手工図画教授の将来と第四種講習科」『信濃教育』第305号、1926、pp. 7-11.
- 長野県教育史刊行会『長野県教育史 第三巻　総説編三』、長野県教育史刊行会、1983
- 長野県教育史刊行会『長野県教育史 第十四巻　資料編八』、長野県教育史刊行会、1979

＊本研究はJSPS科研費JP17K17780の助成を受けたものです。